ボールがつなぐ社会と人間の多様性

ダイバーシティカップ報告書

Diversity Cup

2015.7.4

in Yoyogi National Gymnasium
Futsal court

◉ 主催 ◉

スポーツフォーソーシャルインクルージョン実行委員会
認定NPO法人ビッグイシュー基金

◉ 協力 ◉

アースガーデン

◉ 目次 ◉

はじめに 3
ダイバーシティカップの可能性：星野智幸 4
大会概要・試合結果報告 6
参加チーム紹介 8
ダイバーシティカップ・プログラム内容 10
参加チームからのレポート
野武士ちゃんぷる：イタリア・ミラノでホームレスW杯に参加した佐々木さん
～ダイバーシティカップに1つのチームで出られたことが何より嬉しい～ 16
FYO：まさかの準優勝！
～新しい人たちとの出会いを通じて次のチャレンジへ～ 18
文化学習蹴球団：人はもっとやさしくて、社会はもっとおもしろい
～次回こその優勝を目指す、文化学習蹴球団～ 20
ピースボート・ピースボールプロジェクト：
～ダイバーシティという言葉がなくても、多様性を自然に受け入れる社会にしていきたい～ 22
フェアスタートと愉快な仲間たち：第1回ダイバーシティカップ優勝！
～スポーツや仲間があることで自分らしくいられる～ 24
フリースクール合同チーム：勝負事としてのサッカーから、自分や相手と付き合うサッカーへ
～他者の存在を尊重することでしかサッカーは始まらない～ 26
FDAフレンドシップ：大会にでることも社会参加のあり方の１つ
～１人ひとりのポテンシャルの活かせる社会へ～ 28
アンケート結果報告 30
収支報告 31
おわりに（ありのままでいい、空間の大切さ）：井上英之 32

はじめに

ビッグイシューでは2004年よりホームレスサッカーチームを応援してきました。住居や仕事に加えて希望も失った人にとって、サッカーは人とのつながりや生きる意欲を取り戻すきっかけになっています。

社会的不利・困難を抱える人々の支援者の方とともにスポーツフォーソーシャルインクルージョン実行委員会を結成し、7月4日、若年無業者、うつ病、LGBTなど様々な背景をもつ当事者が参加する「ダイバーシティカップ」を開催することができました。

ダイバーシティカップは、違った境遇に置かれた当事者が自分のことやチームメイトの経験や多様性をスポーツを通じて互いに認め合う試みでした。この取り組みはまだ始まったばかりですが、ダイバーシティを言葉から空間に、そして人々がいきいきできる社会的な場として現すことができたのではないかと思っています。

この大会を成功裏に終えることができたのは、クラウドファンディングでご支援下さった104名、チャリティ大会の参加者74名（モルガンスタンレー、シティグループ、ドイツ銀行グループ、BNPパリバ、UBSの社員有志）、大会ボランティア38名、ビッグイシュー基金の応援会員・寄付者など多くの皆様のおかげです。本当にありがとうございました。

この報告書へは「ダイバーシティカップの可能性」を作家の星野智幸さん、おわりに「ありのままでいい、空間の大切さ」をビッグイシュー基金理事の井上英之さんに文章を寄せてもらいました。大会の様子や参加者の声を楽しみながらお読み頂ければ幸いです。

認定NPO法人 ビッグイシュー基金
長谷川知広

※ダイバーシティ：多様性の意味。性別や年齢、国籍、障害、価値観、文化などあらゆる面に通じる概念。

寄稿

ダイバーシティカップの可能性

「社会復帰」という言葉への違和感。
自分だけの世界に閉じこもらず、社会の「標準」を変えていく

作家　星野智幸（ほしの・ともゆき）

あるかのようにされている境界線を、楽々と越えられる体験

私自身、サッカーをしていて夢中になると素の自分になるというか、日頃の立場とかを全部忘れてしまいます。素の自分、生の自分がぶつかりあう場、さらし合う場になるのがサッカーだと思うんです。そういう時は立場を越えるというか、忘れている状態なので、後から振り返ると、一緒に何かをしているという気持ちが、充実感とともにすごくあります。

どんな人であってもそれが起こり得るし、それはサッカーのもつ素晴らしい可能性だと思っています。

野武士ジャパンの場合は、ホームレス状態にあったり、その経験者だった人が参加しているわけですが、実際に一緒にボールを蹴ってみると、みんな夢中になってムキになったり、シュートが決まらないとふてくされたり、自分と同じ普通の人間だってことを肌であらためて感じます。

そういうかたちで楽々と、本来あるかのようにされている境界線や垣根みたいなものを越えられることがサッカーでは体験できます。今回のダイバーシティカップは、そういう立場を超えるきっかけになる試みだと思います。

参加するチームは、いろいろな背景や立場にある知らない人同士。本来は、お互いに出会う場がなく、いきなり出会っても共通・共有するものがないから何を話していいかわからない。でも、サッカーというのは、国さえ越えてしまうくらいの言語です。国を越えるぐらいなので、同じ日本社会の小さな境界というか、境界だと思われているものくらいは、軽く越えられると思います。

一緒にゲームをすれば、そこからまた共通の話題が作られるし、無理なくみんなが同じ場に、同じ地平の立場で、スーッと入っていける機会になるのだと思います。

ホームレスサッカー日韓戦では一緒にプレー！

自分の小さな世界から出ると、楽になる。この大会はそのモデルのような試み

今の社会では自分の立場に閉じこもって自分の領域を越えずに自分のことを正当化したり、そこからほかの人たちを非難したいとか、そういう欲求が溢れているように感じます。でも、非難すればするほど、お互いに苦しくなっていく。

その流れを変え得るのは「自分が正しくて向こうがおかしい」というような態度ではないと思います。自分が閉じこもっている小さな世界から一歩出て、だけど相手の土俵の中に入っていくわけでもなくて、その代わりに、他の人たちにも出てもらう。そうしたときに、頑なに受け入れられなかったものが、全然思っていたものではなく、そんなに違いはないじゃないかと、そういう風に見えてくるのではないかと思うんです。

今は、自分を正当化するために自分と違う立場の人や世界を「見たがらない」ところがある。そうではなくて、むしろ自分の方を「カッコにくくる」かたちで、一歩外に出たほうが見えてくるものがあるし、自分も楽になるのではないでしょうか。

そういう意味で、ダイバーシティカップは、その小さなシミュレーションであり、一つのモデルケースのような試みだと思っています。

社会の「標準」を変えて、多様性が日常のことになればいい

サッカーというのは、人を救う要素があります。いろいろ困難を抱える人が、観るのでもやるのでも、サッカーに触れることで自分をリセットできる。

あとは、社会の「標準」の概念というのを変えるものになったらいいですよね。路上に出るとか、いわゆる一般の社会から外れた人たちに対して、「社会復帰」という言葉を使うときに、いつもすごい違和感を覚えるんです。

復帰する社会の方がおかしいのだったら、それに合わせることを目指して一生懸命努力してもどうなのか。自分を排除するような社会のところに、もう一度適応できるように自分をつくりなおして入るということがいいのかといつも思うんです。

標準を変えて、社会のほうがもっといいものになるべきであって、ダイバーシティカップはそういう社会像の一つの提示になると思います。多様性があるということが、社会の日常になったらいい。社会はそういうものになり得るということを示すのも、大事なことかなと思います。

この大会をイベントで終わらせて元の日常に戻ってしまうのではなく、ここで得たものをそれぞれの日常に持ち帰ってほしいですね。

◉プロフィール

星野智幸（ほしの・ともゆき）

作家。1965年米国ロサンゼルス生まれ。早稲田大学第一文学部卒業後、2 年半の新聞記者勤めを経て、メキシコに2年間留学。1997年『最後の吐息』で文藝賞を受賞してデビュー。2000年『目覚めよと人魚は歌う』で三島由紀夫賞、2003年『ファンタジスタ』で野間文芸新人賞、2011年『俺俺』で大江健三郎賞、2014年『夜は終わらない』で読売文学賞を受賞。他の作品に『ロンリー・ハーツ・キラー』『われら猫の子』『無間道』など。エッセイ集に『未来の記憶は蘭のなかで作られる』がある。2010年から路上文学賞を主宰。

大会概要・試合結果報告

開催日時……2015年７月４日（土曜日）
場所……国立代々木競技場フットサルコート
参加チーム……10チーム（選手146名）
総試合数……28試合
ボランティアスタッフ……38名
見学者……約50名
総参加者数……約250名

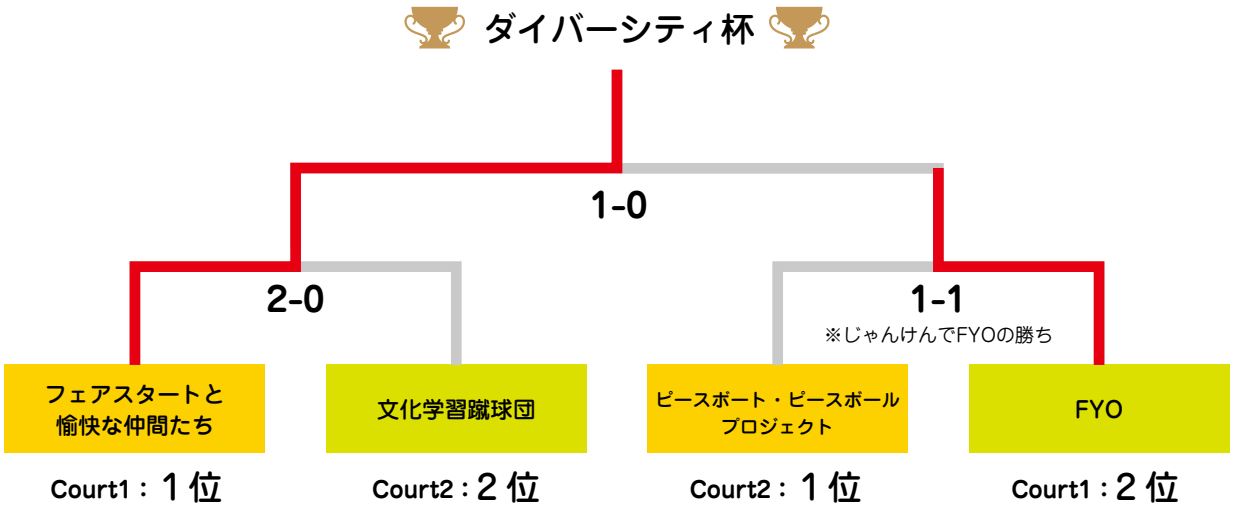
◉リーグ戦結果

Court 1						
	フェアスタートと愉快な仲間たち	オムハビユナイテッド	FYO	ちぃむ小心者	フリースクール合同チーム	勝点
フェアスタートと愉快な仲間たち		2-1	3-2	2-0	3-1	12
オムハビユナイテッド	1-2		1-3	1-0	0-1	3
FYO	2-3	3-1		0-0	3-3	5
ちぃむ小心者	0-2	0-1	0-0		1-1	2
フリースクール合同チーム	1-3	1-0	3-3	1-1		5

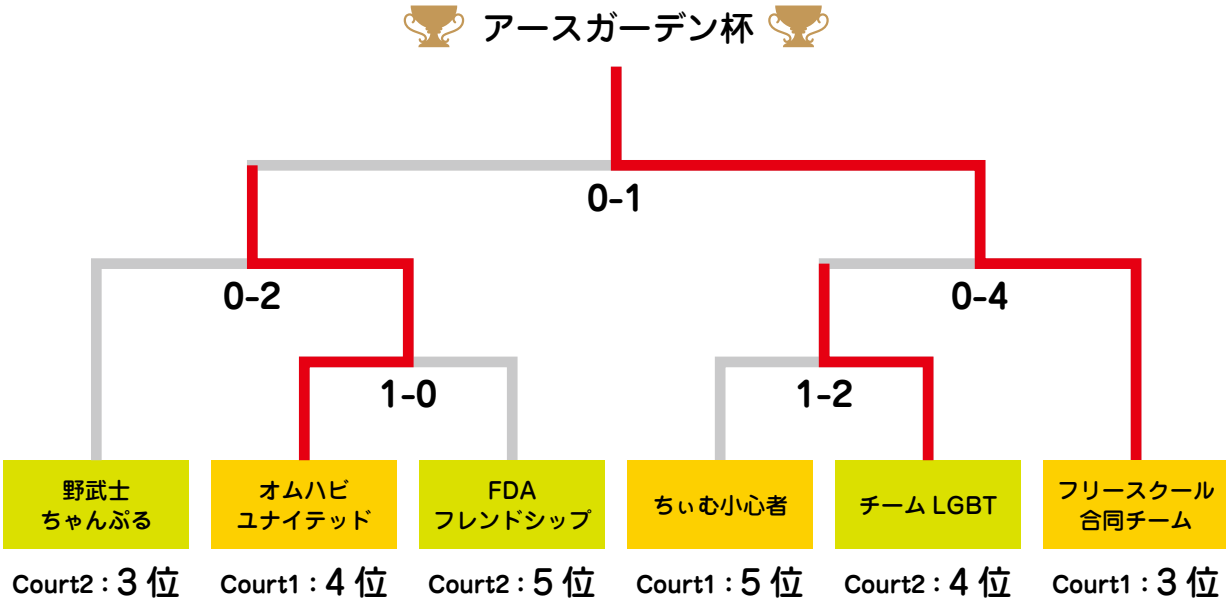
Court 2						
	ピースボート・ピースボールプロジェクト	FDAフレンドシップ	チーム LGBT	文化学習蹴球団	野武士ちゃんぷる	勝点
ピースボート・ピースボールプロジェクト		4-0	3-1	5-2	2-0	12
FDAフレンドシップ	0-4		0-1	0-5	0-5	0
チーム LGBT	1-3	1-0		2-4	0-1	3
文化学習蹴球団	2-5	5-0	4-2		1-1	7
野武士ちゃんぷる	0-2	5-0	1-0	1-1		7

◉トーナメント戦結果

ダイバーシティ杯	優　勝……	フェアスタートと愉快な仲間たち
	準優勝……	FYO



アースガーデン杯	優　勝……	フリースクール合同チーム
	準優勝……	オムハビユナイテッド



参加チーム紹介 ※当日の大会配布資料より抜粋

Court 1

フェアスタートと愉快な仲間たち

児童養護施設など社会的養護を経験した若者達で結成された「フェアスタートと愉快な仲間たち」。施設出身という「ブランド」はフットサルの世界でも、もはや最強！大会優勝本命候補として手加減抜きで、本気で優勝を狙いに行くのでお手柔らかに！監督のフェアスタート代表永岡鉄平は、当日はただのマスコットです。

オムハビユナイテッド

Omhabi United（オムハビユナイテッド）は、うつ病等の再発予防訓練・社会復帰支援サービスの利用者及びそのOBで構成されるフットサルチームです。体力向上・ストレス発散・行動実験・利用者とOBとの交流等を目的とし月2回程度活動しています。創設して1年が経過したばかりの若いチームで、サッカー経験者も少なく、練習メニューなども試行錯誤しながらの活動ですが、徐々に参加者も増え、5月には初めて大会に出場しました。本大会が2回目の大会出場となりますが、試合だけでなく他の参加チームの方々との交流も楽しみにしています。

FYO

2008年に福島県郡山市に開かれた多様な若者が集まるコミュニティースペース「ぴーなっつ」。今回は「ぴーなっつ」メンバー「ビーンズふくしま」「四つ葉学舎」連合で結成したチームです。複数団体ですが「ぴーなっつ」と言う場にゆかりのある面々が、この大会に結集しました！ 「ぴーなっつ」のキャッチフレーズは「人が出会い・笑顔が生まれ・街の姿を変えるコミュニティーＢＯＸ」。皆さんとの出会いや真剣勝負の中の笑顔と出会いを求めて上京します。ぜひゲームや交流を宜しくお願いします。

ちぃむ小心者

「ちぃむ小心者」は、認定NPO法人「育て上げネット」から来ました。「育て上げネット」は、«Vision：すべての若者が社会的所属を獲得し「働く」と「働き続ける」を実現できる社会»、«Mission：若者と社会をつなぐ»を理念とし、若者達が自立する社会を目指している団体です。ちぃむ小心者のメンバーひとりひとりは、普段大それたことなどできない小心者です。しかし、今回はスタッフ、ジョブトレの現役生・卒業生を含め、ジョブトレ史上最強のメンバーでチームを編成しました。小心者ながら昨年は、とある大会で準優勝という大それたことをして、その大それた自信を胸に今大会は精一杯頑張ります！

フリースクール合同チーム

フリースクール全国ネットワーク加盟のフリースクール有志によるチームです。メンバーは年齢もバラバラならフットサル経験の有無もバラバラ、フリースクールにはグランドもないし、ひとつのフリースクールではチームをつくるだけの人数が集まらないこともある。そんな環境でも、無いものは無いなりに、工夫して楽しむことにかけては自信があります。時にゆる～く、時にはびしっと、怪我の無いようやっていきましょう。

Court 2

ピースボート・ピースボールプロジェクト

1983年に設立された国際NGO「ピースボート」。地球一周をはじめとする「国際交流の船旅」を企画し、これまでに5万人をこえる人が参加しました。国連の特別協議資格も取得し、国際協力、交流、検証を続けながら、世界中の人々の声を国際社会に反映させてゆく活動を行っています。サッカーをテーマに国際協力を行う「ピースボールプロジェクト」では、これまでに44カ国に12,500個のボールを届け、現地でサッカー交流を展開しています。本大会ではサッカーを通してたくさんの出会いあることを願っています。

FDAフレンドシップ

NPO法人FDAは川崎に拠点を構え、障がい者・ひきこもり・生活保護者など社会で生きづらさを抱える方々に就労支援を通じて「社会とつながる」きっかけづくりを行っています。今回は、スタッフと利用者で協力し合いながら楽しい大会にできればと考えています。

チームLGBT

メンバーは主にLGBT（L：レズビアン、G：ゲイ、B：バイセクシュアル、T：トランスジェンダー）の当事者で構成されています。まだ社会の中で生きづらさを感じることが多いけど、でもスポーツを通して「結局みんなおんなじ人間だよね」ってお互い理解し合えたらステキだな～って思ってます。ちなみにLGBTフレンドリーの人のことを"アライ"と呼びます。今日を機にみなさんも私たちのサポーター、アライになってくれたら嬉しいです！

文化学習蹴球団

NPO法人文化学習協同ネットワークでは、『人はもっとやさしくて、社会はもっとおもしろい』を合言葉に、若者たちと日々様々な活動をしています。フットサルもその中の一つ。フットサルを通して仲間と出会い、新たな人や社会と出会っていくことを目指しています。今回は三鷹と相模原の2拠点の若者が合同チームを結成。普段なかなか接することはなかったのですが、この大会を機に新たな仲間との出会いが生まれました！今日はもっと多くの人との出会い、期待しています！世界は無限、目指すは優勝、感動と興奮を共有しましょう！

野武士ちゃんぷる

ホームレスワールドカップ日本代表「野武士ジャパン」。2012年のホームレスサッカー日韓戦以来、表舞台にはでず、こっそりと月2回の練習を重ねてきました。今は、ビッグイシューの販売者だけでなく、ホームレス状態の人、卒業生、近所のおじさん、スタッフ、ボランティア、でワイワイガヤガヤと練習をしています。今回の大会は大阪のメンバーもごちゃまぜで、野武士ジャパンちゃんぷるとして、悲願の一勝を目指します。試合だけでなく交流会でみなさんとお話しできるのを楽しみにしています。宜しくお願いします！

ダイバーシティカップ・プログラム内容

◉ダイバーシティカップの運営で大切にしたこと

◇1人1人の持つ違いや多様性を大切に試合と交流会を行いました。試合には真剣に取り組みナイスプレーが続出。真剣にゲームをすることで自然と敵味方に関係なく応援する光景が見られました。

◉フットサル大会

◇試合開始前に心身の緊張をほぐすためにウォーミングアップ兼アイスブレイクを実施。
①自分の名前を伝えて、できるだけ多くの人と相手の目を見て握手（Ｆ１）
②自分の名前を伝えて、できるだけ多くの人とハイタッチ（Ｆ２）
③グラウンドの中を自由に走る。走りながら笛が鳴ったら「パン！」と手をたたく
笛に合わせて手をたたく回数を1回ずつ増やしていく
笛「パン！」、笛「パン！」「パン！」、笛「パン！」「パン！」「パン！」という具合。（Ｆ３）
④コーチはあるタイミングで笛ではなく「集まれ！」と言う。
「集まれ！」と言われたら、その直前に手をたたいた回数分の人数で集まり手をつないで座る。直前に手を2回たたいているのであれば2人で着席（Ｆ４）

◇試合
・チームごとのレベル差が大きくなり過ぎないよう試合時間を短く（５分ハーフ）、交代は自由交代としました。
・試合方式は5チームによるリーグ戦を行い、上位２位の計４チームによるダイバーシティ杯、下位の３位以下の計６チームによるアースガーデン杯を競いました。

ダイバーシティ杯　　優勝　準優勝　3位　4位
アースガーデン杯　　優勝　準優勝　3位　4位　5位　6位

以上、全10チームにカップを贈呈

◉交流会

◇フットサル場に隣接するカフェを１日お借りし試合の合間の休憩と試合後に食事会を行いました。
◇食事会の後は、飲み物を飲みながら5人1グループで下記のテーマでテーブルトークをしました。
①サッカーをするきっかけ・大会参加のきっかけ（Ｋ１）
②今日のサッカーで良かったところ（Ｋ２）
～グループ替え～
③もっとサッカーを楽しむには何ができるか（Ｋ３）
④サッカー以外でもこれからチャレンジしたいこと（Ｋ４）
～テーブルごとに話した内容を全体共有～

◉アイスブレイクの様子（F1 ～ F2）

F1 自分の名前を伝えて、相手の目を見て握手

F2 自分の名前を伝えて、相手とハイタッチ

ダイバーシティカップ・プログラム内容

◉アイスブレイクの様子（F3 ～ F4）

F3 グラウンドの中を自由に走って、笛が鳴ったら拍手

F4 「集まれ！」と言われたら、直前に手をたたいた回数分の人数で集まり座る。

◉交流会の様子（K1 ～ K2）

K1 サッカーをするきっかけ・大会参加のきっかけ

K2 今日のサッカーで良かったところ（個人でも、チームでも）

ダイバーシティカップ・プログラム内容

◉交流会の様子（グループ替え・K3 ～ K4）

K3 もっとサッカーを楽しむには？

K4 サッカー以外でもこれからチャレンジしたいこと

グループ内で話したことを全体共有

Diversity Cup 2015.7.4
in Yoyogi National Gymnasium Futsal court

◉ Report　野武士ちゃんぷる

イタリア・ミラノでホームレスW杯に参
～ダイバーシティカップに１つのチーム

2009年にミラノで開催されたホームレスワールドカップに日本代表選手として参加した佐々木さん。現在は、様々な社会制度を活用して路上生活を脱し、仕事をつづけながらサッカーの練習に参加。ダイバーシティカップに参加しての感想を聞きました。

元ホームレスとみられることが嫌だった

自分は、去年の5月にあった練習試合で思ったようなプレーができなくて、それが悔しくて感情が爆発。その後は、ばつが悪くて練習を休んでいました。

今思うと、自分の思うようにプレーができなくって感情を爆発させてしまったことだけが休んだ理由ではなく、もう一つ理由があったんです。

それは、自分はホームレス状態を抜け出しているのに、元ホームレスとして見られたり、野武士ジャパンの選手として扱われるということでした。

なんで、もう路上から抜け出しているのに、そういった色眼鏡で見られなければいけないのか、今、自分は新しい生活に向けて頑張っているのにと……。

野武士ちゃんぷるとして初試合

ただ、今回のダイバーシティカップの話を聞いた時、「野武士ジャパンの練習で重ねてきたメンバーがもつ1人1人の多様性を大切にしよう。ホームレス状態の人とか、元選手とか、ボランティアとかそういった枠を超えていつも一緒に練習をしているメンバーで1つのチームを出そう」ということになったんです。

それなら、自分が元ホームレスとか、誰が選手とか関係なく、サッカーを楽しめるなって思いました。 チーム名は「野武士ちゃんぷる」。

自分と同じようにビッグイシューをしていたメンバーや他のホームレス支援団体に関わる人、学生、社会人、いろんな人たちで一緒にチームとして出ました。

参加チームからのレポート

参加した佐々木さん
で出られたことが何より嬉しい～

試合結果は、2勝。今までなかなか試合で勝つことができてなかったし、勝てて嬉しかったです。何より一緒に練習してきたメンバーでチームを組めたことが嬉しかったです。自分も1点決められたし。

それと、今回の大会は今までの大会で味わったことのないような温かさを感じました。それは、相手のチームの人たちも、ホームレス状態ではないにしろ、ひきこもりやうつ病など何らかの苦労をしてきていて、でも、それぞれが頑張ろうとしている姿から感じたのかもしれません。ほんと、見た目は、みんな元気で何者かなんてわからないんですけどね。

お互い1歩ずつ、頑張れたらと……

試合後の交流会では、「フェアスタートと愉快な仲間たち」という養護施設出身の23歳の子と話したのが印象に残っています。

あまり詳しいことは言えませんが自分も家族関係でいろいろあったんで……彼らもいろんなものを抱えながらも頑張っているのかなと思いました。

今回、彼らは7人と少人数にも関わらず優勝したんです。すごいチームワークだなぁって。覚えていてもらえるかは分からないけれど次回の大会で再会できたら嬉しいなと密かに思っています。

まさかの準優勝！
～新しい人たちとの出会いを通じて次の

2008年に福島県郡山市で開かれた多様な若者が集うコミュニティスペース「ぴーなっつ」。かつて、ぴーなっつに通い、この大会に参加するために新潟から足を運んだ青木さん。大会での思い出や今の取り組みを聞きました。

こういった場に出られたことが、自信につながった

――今回の大会に出ることになった経緯を教えて下さい。

自分は大学時代を福島県で過ごしていたんです。その当時、郡山市に若者が集うコミュニティスペース「ぴーなっつ」という場所ができて、学校外で多くの時間を過ごしていました。

その後、東日本大震災が起きて自分の住んでいる福島県の状況が大きく様変わりする中で、自分にも何かできないかと思い田村市の復興支援の仕事に就きました。ただ、復興支援に関わる仕事はなかなか大変で体調を壊してしまい、紆余曲折あり今年3月に地元である新潟に戻ってゆっくりと静養することにしたんです。「ひきこもり」という言葉が該当するのか分かりませんが、人から連絡をもらえば返事はするけれど、自分からは連絡したり会いに行ったりするのができないような状況でした。

ただ、6月頃から少しずつ元気が出てきて、親しい友人など信頼のできる人に会うようになったんです。ちょうどその時期に、「ぴーなっつ」の創設に関わったNPO法人ビーンズふくしまの鈴木綾さんに「ダイバーシティカップ」のことを聞いて、外に出て人と関わりたくなっていたことと、綾さんが勧めてくれる場だったら信頼できると思い参加することにしました。

――試合はどうでしたか。

自分は中学高校とサッカー部で大学の2年までサークルでサッカーをしていたので、ある程度動ける自信はあったのですが、久しぶりに身体を動かすので、けっこう、きつかったです。（笑）

でも、「ぴーなっつ」を通じて出会ったメンバーと久しぶりに再会し、サッカーという今まで一緒にやったことのない形でチャレンジするのは楽しかったです。普段と違うメンバーの表情も見られましたし。（笑）

――結果はどうでしたか。

まさかの準優勝です！正直、1点取れるか、1試合勝てるかという自信もなかったので、びっくりですし嬉しかったです。（笑） ただ、これは自分の力やチームのメンバーだけで勝ったというよりは、うちのチームのプレーヤーが少ないので、イベント主催者のはせさんが、サッカーのできるボランティアの人を加えてくれて、助っ人プレーヤーが活躍してくれたことも大きかったです。でも、はじめて出会うボランティアの人を含めて、一緒にボールを追い、同じチーム

参加チームからのレポート

チャレンジへ〜

の仲間として試合できたのは、純粋に楽しかったです。1試合ずつ団結していくような感じもありました。

――試合以外でも印象に残っていることはありますか。

いくつかあります。

1つは、自分たちのチームは遠方からの参加ということで、前日にオリンピックセンターで宿泊させてもらったんですが、その時に、「野武士ちゃんぷる」の大阪メンバーである大江さんと一緒に食事させてもらったんです。大江さんは以前にホームレスワールドカップに参加していてホームレス経験をしている方なんです。でも、ずっと駄洒落を言っていて「ホームレス」の人に対してもっていた先入観みたいなのが壊れました。「あ。この人、大阪のおじさんだって」。(笑)

他には、試合後に他のチームの人と交流する機会があったんですが、一緒にサッカーをしていたこともあって初対面の人でもあまり緊張せずに話せました。みんな、いろんなことを抱えつつも頑張っているというのも刺激になりましたし、「自分こういった場所でも話せるようになってきたんだ」ってちょっと自信になりました。

――ダイバーシティカップ後に、新しいチャレンジをしていると聞きましたがどんなことをしているんですか。

これも、ダイバーシティカップを誘ってくれた鈴木綾さんの紹介で、北海道にある若者支援の団体で、農業や家の修理、草取りなどしています。ただ、いきなり全力で頑張ってしまうと反動がでてしまうのでそのバランスが難しいです。少しずつ新しいことにチャレンジしていけたらと思っています。

――第2回の大会があったら参加したいですか。

また参加したいですね。今回はチーム全員で盛り上がれて、とにかく楽しかったです。ただ体力的にしんどかったので、もう少し体力をつけたいです。また、サッカーを通じて様々な人と交流できればと思っています。

◉ Report　文化学習蹴球団

人はもっとやさしくて、社会はもっとお
～次回こその優勝を目指す、文化学習蹴

子どもたちの学習支援や不登校児童・生徒の居場所づくり、若者の社会参加や就労支援を長年行ってきた「文化学習協同ネットワーク」。ダイバーシティカップに参加した経緯や、参加した３人の若者の感想を聞きました。

――まず、文化学習協同ネットワークの活動について教えて下さい。

［スタッフ］文化学習協同ネットワークは『人はもっとやさしくて、社会はもっとおもしろい』を合言葉に若者たちと日々様々な活動をしています。フットサルはさがみはら若者サポートステーションのアクティビティプログラムの1つで、フットサルを通じて仲間と出会い新たな人や社会と出会っていくことを目指しています。就労に向けたトレーニングなどもあるのですが、アートワークや写真部、卓球、バトミントンなど、若者が楽しんで参加しながら人との関係性を再構築していくきっかけをつくっているのが特徴です。

リベンジの機会を探していたんです。（笑）

――ダイバーシティカップに参加する経緯はどのようなものだったのでしょうか。

［スタッフ］ビッグイッシュー基金からダイバーシティカップの誘いを受け、若者たちに話したところ、面白そうだから参加しようという話になりました。ここから先は、参加者の3人に直接話をしてもらいますね。

［Ａさん］自分たちは週1回サポートステーションのプログラムでフットサルをしています。参加者は10名ちょっとでサッカー経験者もいますが未経験の人間も多くいます。いつも、1時間くらいボールを蹴った後に振り返りの時間を持って、ゲームについて「あーでもない。こーでもない。いや、もっとこんな動きをしたらどうだろう」と話をして、その後自主練をしたりと、楽しみながらも真剣にやっています。

じつは、今年の2月に自分たちで参加資金を稼ぎ出して町田で開かれたフットサル大会に参加したのですが、惨敗してしまってリベンジの機会を探していたんです。（笑）

仲間がベースにあって
新しいことにチャレンジができる

――フットサルをすることやチームメイトができることで、何か変化はありましたか。

［Ｂさん］自分は学校生活で上手くいかないことがあり人との関係に距離を置くようになりました。でも本当は、ひきこもりをしたくてひきこもっているわけではなくその生活から抜け出したかった。自分なりにもがいて、それでも上

参加チームからのレポート

もしろい
球団～

手くいかず、自分のことを否定しどんどんと孤立感が強くなっていました。そんな時に、文化学習協同ネットワークの事を知り、同じような境遇の人と出会い友達ができたのは本当に大きかったです。

ただ、最初、サポートステーションのプログラムを利用し始めた頃は人への不信感があったんです。だから、本音では人と交流をしたいと思っていてもどう話してよいか分からない。そんな時に、フットサルや様々なアクティビティがあって話すきっかけをもてて少しずつ人を信頼できるようになったのは大きかったと思います。仕事を探していく上でも仲間がベースにあってできる気がしています。

気持ちの持ち方の大切さを感じた大会

――ダイバーシティカップはどうでしたか。

［Cさん］リーグ戦で2勝しダイバーシティ杯にすすめたのですが「フェアスタートと愉快な仲間たち」に負けてしまいました。言い訳になってしまうかもしれまんが、今回は相模原メンバーだけでなく三鷹のメンバーも混ざり人数が多かったので1人当たりのプレーの時間が短くなってしまいました。もっと1人1人のプレー時間が長ければ勝てたかもしれないという気持ちがあります。でも、普段、同じ団体を利用していても拠点が違うと出会わないメンバーに会えたので良かったです。負けて悔しいですけど。（笑）

――交流会はどうでしたか。

［Bさん］初対面の人ばかりで最初は緊張していたんですが、一緒にボールを蹴ったこともあり、

思った以上に深い話ができて良かったです。今回の大会に参加している人は自分たちもそうですが、いわゆる「社会的マイノリティ」と呼ばれる人たち。自分は今の自分の状況に対して、社会のレールを外れたような劣等感や否定的な意識をもっていました。でも、チームLGBTの人と話した時に感じたんですがLGBTの人は見た目では分からない。これって自分たちも同じ。そう考えると、みんな立場や名称こそ違えど何らかの過去や困難を抱えながら生きているのかもしれない。自分の気持ちの持ちようで物事の見え方が変わるのではないかと思いました。

――今後、ダイバーシティカップの参加者と一緒にやってみたいことはありますか。

［Aさん］交流会の食事を大会参加者で一緒につくってみたり、サッカー以外のスポーツをしてみたり、もっといろんな形で交流や話ができたら自分たちの世界が広がって良いなと思います。

あとは、仕事が決まって文化学習蹴球団を卒業することになったら、今度はOBチームを作って試合をしたいですね。でも、まずは負けて悔しい思いがあるのでリベンジの機会が欲しいです。（笑）

◉ Report　ピースボート・ピースボールプロジェクト

ダイバーシティという言葉がなくても、多様性を自然に受け入れる社会にしてい

地球一周をはじめとする「国際交流の船旅」を企画し、これまでに5万人をこえる人が参加したピースボート。ダイバーシティカップには、サッカーをテーマに国際協力を行う「ピースボールプロジェクト」のメンバーが参加。ピースボールプロジェクトの取り組みやダイバーシティカップに参加しての感想をプロジェクトリーダーの三浦さんに聞きました。

ピースボートと ダイバーシティカップ

――ダイバーシティカップへ参加した経緯を教えて下さい。

ビッグイシュー基金からダイバーシティカップの話を聞き、大会の目指しているコンセプトが自分たちの活動と親和性があると思い連絡をさせてもらいました。

ピースボートというと、地球1周する船の旅をしているというイメージが強いと思うのですが、ピースボートが目指しているのは、船の旅を通じて他者や世界のことを知り1人1人の人間が自分なりの世界への関わり方を考えてもらうことを大切にしています。

船に乗っているメンバーは、年齢も性別も様々で、不登校やLGBT、バイリンガルなど本当に多様な人がいます。そして、海外に行けば日本人である私たちが外国人となり社会的なマイノリティとなります。日本で当たり前に考えてきた価値観が相対化され、様々な考え方、文化を受け入れるダイバーシティ（多様性）が必要となります。

そういった意味で、ピースボートが大切にしてきた多様性を日本社会の中で形にしようという大会のコンセプトに共感したというのが参加のきっかけでした。

また、私自身は、船の旅の中で「ピースボールプロジェクト」という世界の貧困地域にボールを届け世界の人々とサッカーを通じて交流する取り組みをしてきたので、サッカーというスポーツに可能性を感じていました。ボール1つあれば、言葉は分からなくても一緒に試合をしたり交流することができます。ダイバーシティカップに参加する「うつ病」や「ひきこもり」など様々な背景をかかえた人とも、ボールさえあれば楽しくお互いを知ることができるのではないかと思いました。

そこで、ピースボートの中でダイバーシティカップのコンセプトを伝え参加を募ったところ、すぐに人が集まり、やはり共通しているところが多いのかもしれないなと感じました。

※ピースボールプロジェクト:これまでに44カ国に12,500個のボールを届け、現地でサッカー交流を展開。

参加チームからのレポート

きたい

今の社会を生きる当事者として大会に参加

――最初は、ダイバーシティカップに参加することに躊躇があったそうですが。

はい。今回のダイバーシティカップは、ホームレスの人や、うつ病、LGBTの人などいわゆる「社会的マイノリティ」の人の参加を積極的に呼び掛けていると聞いていたので、そういった言葉でカテゴライズできない自分たちが参加して良いのだろうかという想いがありました。

ただ、ビッグイシュー基金から「ピースボートに乗った人の中には、不登校経験者やLGBTの人がいるだけでなく、船旅や海外に行く経験を通じて自分のことを相対化し社会のことを自分事としてとらえ動いている人が多くいると思うので、今の社会を生きる当事者なのではないか」と言ってもらい、それだったら、自分たちがこれまでしてきたことの延長で参加しても良いのではないかと思うようになりました。

――大会はどうでしたか。

リーグ戦を順当に勝ち上がり、ダイバーシティ杯も優勝できるかもしれないと思っていたのですが、準決勝で同点の末じゃんけんで負けてしまい決勝には進めませんでした。じゃんけんでの負けが悔やまれます。笑

とはいえ、この大会に共感しピースボートの中で出会ったことのないメンバーが集い大会に出られたことや、交流会で様々な人と話ができて良かったです。交流会で、チームLGBTの人が、LGBTとは何かを丁寧に説明しそれをみんな真剣に聞いていたり、自分たちピースボールプロジェクトのことに興味を持ってもらえたり、新しい出会いがもてて良かったです。

様々な人と出会う場が、多様性を育てるためには大切

――お子さんも連れて参加されてましたが、どういった想いからだったのでしょうか

今回、自分の娘2人と妻も参加させてもらいました。これは、ピースボートの旅を通じて感じたことなのですが、社会には様々な価値観や背景をもった人がいるということは言葉で教えるようなものではなく肌身で感じてもらうことが大切だと思うんです。

自分自身10年前、船に乗る前まで社会的なことに関心がなく、今回の大会参加者のような人たちに対して偏見をもっていました。でも旅を通じて徐々に社会の見え方が変わってきました。だから、ダイバーシティカップに参加し、あの人がLGBTなんだよとか伝えるんじゃなくて、いろんな人がいる、そしてそのことを自然なこととして受け入れて育ってもらえたらと思っています。

多様性、サッカー、たくさんの共通項があるのでこれからも一緒にできることを探していきたいですね。

◉ Report　フェアスタートと愉快な仲間たち

第1回ダイバーシティカップ優勝！「フ
～スポーツや仲間があることで自分らし

児童養護施設など社会的養護を経験した若者達で結成された「フェアスタートと愉快な仲間たち」。第１回ダイバーシティカップを見事優勝。チームリーダーの中島さんにフェアスタートの出会いや大会へ参加しての感想を聞きました。

フェアスタートとの出会いを通じて仕事を転職

――「フェアスタート」との出会いはどのようなものだったのでしょうか。

自分は施設を出た後にカラオケのバイトをしていました。バイト自体は楽しいし他にやりたいことがなかったのでずるずると続けていて、この先どうしようかなという不安がでてきた頃に、施設の人に紹介されフェアスタートの永岡さんに会ったんです。仕事の相談や適性検査を受け、ITの会社の求人を紹介してもらい２回面接をして無事に仕事に就くことができました。

今の仕事は楽しいという感覚とは少し違いますが、日々いろんな人と話す機会があるので勉強になっています。前の仕事は仕方なく就職した感じがあったんですが、今の仕事は自分で決断したから続けていきたいなと思っています。

スポーツや仲間があることで自分らしくいられる

――ダイバーシティカップはフェアスタートを通じて知ったんですか。

参加チームからのレポート

ェアスタートと愉快な仲間たち」
くいられる～

はい。永岡さんから「今度、面白いフットサル大会があるから出てみないか」って誘ってもらって、体を動かすのも好きだし新しい人と出会える機会かなと思って出ることにしました。

――中島さんにとって、スポーツや人とのつながりがもつ意味は大きいですか。

施設を出た後はどうしても日々の生活があるので施設の人や同級生とのつながりが薄くなってしまうところがあるんです。でも、フェアスタートを通じて、季節の催しに参加したり楽しみながら人とのつながりを持てるのは大きいです。やっぱり仲間がいるのといないのでは精神的にも違います。

それと自分は、人見知りであまり人と話すのが得意でなくて……スポーツがあると人とコミュニケーションしやすく自分を表現できるような感覚があります。試合中に、人見知りとかしている暇ないですから。（笑）

――ダイバーシティカップに参加してみてどうでしたか。

今回は永岡さんから呼びかけてもらい初めて結成したチームだったので、チーム内でも初対面の人もいて少し緊張したんですが、試合を重ねる中でチームが結束していったように思います。接戦の試合が多かったんですが優勝できて純粋に嬉しかったです。第2回の大会があれば出たいですね。

交流会では、他のチームの人と混ざって話す際に「大会参加のきっかけ」や「サッカー以外でもこれから頑張りたいこと」といったテーマがあって話しやすかったです。みんなそれぞれのチームごとにいろんな悩みを持っているけれど頑張っているんだなって感じて、自分も頑張っていけたらなと思いました。

――今後、チャレンジしたいことはありますか。

まずは今の仕事を続けていきたいと思っています。それと、仕事外の時間をもっと充実させて、野球でもフットサルでもスポーツのつながりを増やしていきたいです。

※フェアスタート：「社会的養護」の対象となる子供達が、社会全体で育まれていくような機会創出に注力した事業を展開。入所中のキャリア教育事業、退所時、退所後の就職あっせん事業、退所後のアフターフォローイベント事業などを実施。

◉ Report　フリースクール合同チーム

勝負事としてのサッカーから、自分や相
～他者の存在を尊重することでしかサッ

シューレ大学や新宿シューレ、ネモネットといった混合のフリースクールメンバーで結成した「フリースクール合同チーム」。サッカーの新たな可能性を感じたという小池さんに大会に参加しての感想を聞きました。

勝負事としてのサッカーから、自分や相手と付き合う合うサッカーへ

――ダイバーシティカップに参加した経緯はどのようなものだったのでしょうか。

自分は普段「シューレ大学」というフリースクールを母体にしたオルタナティブ大学に通っているのですが、友人を通じて野武士ジャパンの練習に何度か参加したことがありました。そこで、ダイバーシティカップの話を聞き、フットサルを通じて様々な人と交流する試みが面白いと思い参加したいと思っていました。

ただ、シューレ大学だけでは試合するメンバーが足りないと思っていたところ、他のフリースクール（新宿シューレやネモネット）からも参加したいという人が出てきたので合同で1チーム出すことになりました。

――小中高とサッカーをしていたそうですが、サッカーが好きだったのでしょうか。

半分はそうなのですが半分は違うんです。というのも、小中高でやっていたサッカーとは、他者と競い他者よりも勝ることが主眼に置かれていて、相手とのつながりを感じたことがほとんどありませんでした。でも本当は、サッカーは人と競い勝敗をつけるだけでなく、人とのつながりや1人1人の個性を生かせる場のはずだと心のどこかで思っていて、その可能性を失いたくなかったんです。

そこで、多様性と人との出会いを趣旨にしたこの大会に参加すれば、これまで経験したことがないサッカーに出会えるのではないかと思い参加することにしました。

――ダイバーシティカップはどうでしたか。

楽しかったです！ダイバーシティカップでは、アイスブレイクがあって自分のチームや相手チームの人との距離が徐々に縮まった上で試合をするという流れでした。その中で、互いの名前を呼び合ったりハイタッチをしたりして、違うチームの人たちとも大会の主旨や関係性を分かち合っていくような感覚がありました。

これまでのサッカーでは試合中や試合後に相手チームの人と話す機会がほとんどなかったのです

参加チームからのレポート

手と付き合うサッカーへ
カーは始まらない～

が、この大会では、味方・相手関係なく良いプレーがあれば声援を送るといった雰囲気を感じていました。ですから負けた試合でも、1人1人が力を出した時間を過ごせたという思いから自然と自分のチーム、そして相手チームのメンバーに「ありがとう」という言葉が出てきました。

よく考えると当たり前なことですが、サッカーとは味方と相手という存在がいて初めて成立するものですよね。大会では、他者の存在を尊重するところから始まるということを肌で感じました。少し大げさかもしれませんが、今まではサッカーとは“人の優劣をつける物差しの道具”だったのものが、この経験を経て“自分や他者を尊重することの豊かさ”を感じるもの、に変化し始めた気がします。

試合自体は、うちのチームには初等部（12歳くらい）のメンバーがいたので、単にサッカーがうまい人がゲームにでるだけではなく、メンバー 1人1人の力や想いをどう活かして試合を進めるかという試行錯誤もあり、自分やチームメンバーと向き合うような時間でもありました。

ともにボールを蹴った感覚が、他者との間にある壁を小さいものに

――他に印象的だったことはありますか。

交流会の場でいろんなチームの人と話したのですが、一緒の大会でボールを蹴った感覚が自分と相手の中にあるので、他者への壁のようなものを1段階か2段階か超えて、これまでのこと

やこれからのことを安心して話せた気がします。

――フリースクールとダイバーシティカップに共通点があったのでしょうか。

そうかもしれないです。自分たちのチームはいわゆる「学校」ではないフリースクールという場で、“自らの関心事から始まる学び”を模索・実践しています。僕は演劇や美術といった表現を中心に活動していますが、そこでも1人として同じ表現はなく、違いがあるということにこそ価値があるのだと感じています。この大会ではそれをサッカーを通して体験することができて本当に楽しかったです。

欲をいえば、1日の試合と交流会だけでは、まだ話足りない、もっとほかのチームの人たちのことを知りたいという思いがでてきたので、2度目の大会やここでの出会いを日常的な付き合いにしていけたらと思っています。またよろしくお願いします。

※フリースクール：学校に行っていない子どもとその親を支援するさまざまな活動を通して、不登校の子ども及び不登校を経験した子どもと、学校外の学び・交流を求める若者の成長と生活の権利を保障し子ども主体の教育のあり方を創造する。

◉ Report　FDAフレンドシップ

大会にでることも社会参加のあり方の１
～１人ひとりのポテンシャルの活かせる

障がいのある方・引きこもり・生活保護受給者など社会で生きづらさを抱える方々に就労支援を通じて社会と「つながる」きっかけづくりを行っているNPO法人FDA。ダイバーシティカップにはスタッフと利用者の垣根を越えて「FDAフレンドシップ」として参加。大会に参加した経緯や普段の活動で大切にしている想いをスタッフの成澤さんに聞きました。

休みの日の過ごし方が日常をより良いものにする

――まず、FDAの活動内容を教えてください。

私たちFDAは川崎市内を中心に、障がいのある方・引きこもり・生活保護受給者など、働きづらさを抱える方々の外出するきっかけ作りから就労支援、就労後の定着支援まで一貫して行っています。病気で仕事を休職・退職してしまった、不登校やいじめにあった経験などで自信が持てないなど壁にぶつかった多様な背景をもった人が利用しているのが特徴です。

――今回の大会に参加した理由はどのようなものだったのでしょうか。

土日を楽しく過ごすことは当たり前のように考えられていますが、就労支援の観点で見た時に見過ごされがちな視点なんです。月曜日から金曜日までジョブトレーニングで仕事に向けての準備を頑張っている人の中には、仕事自体に価値を見出してFDAを家のように感じてくれる人もいます。でも、私たちが目指しているのはFDAの中だけで完結するような自立ではないんです。平日は本人のペースで頑張って仕事をし、休みの日には、映画に行ったり、友達と遊んだり、そうした日常生活を本人たちが楽しめるようにしていくことが大切だと考えています。

そうした想いから、今、土曜日に様々な活動を利用者と相談しながら行っています。卓球を

したり、鉄板焼きをしたり、ブラインドサッカーの観戦に行ったり、本当に様々な活動をしています。こうした余暇活動を通じて、一人ひとりの好きなものが見つかり、FDAを卒業した後も仕事や日常生活を楽しんでいってもらえたらと思っています。

今回のダイバーシティカップもそうした活動の延長で、サッカーをすることや同じチームのメンバー、対戦相手との交流ができて良いきっかけになると思い参加することにしました。

――メンバーはすぐに集まりましたか。

普段、フットサルをしているメンバーではないので、この人を誘ったらどうかなと思う人に１人ずつ声をかけていき、最終的には16人集まりました。試合は勝てませんでしたが、こうした場に参加することが大きな一歩だと思っているので、結果はあまり気にしていません。（笑）

参加チームからのレポート

つ
社会へ～

でも、体力をつけるのは何を続けていく上でも大切なので、また機会があれば「野武士ちゃんぷる」さんと一緒に練習をしたり、練習試合をしたりできるとさらに良いなと思っています。

――成澤さんもプレーされていましたがどうでしたか。

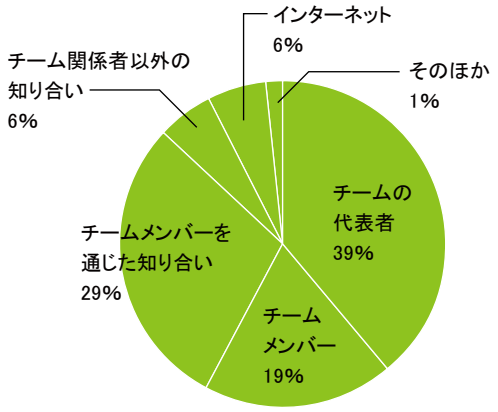
自分は、3歳の時に網膜色素変性症という難病であると診断され、徐々に視力を失い、今認識できるのは光のみです。でも、新しいことや楽しいことにはチャレンジしたいと思っているので、FDAフレンドシップの一員としてプレーをして良い汗をかくことができました。ただ、ブラインドサッカーのように音のなるボールがあれば、もっと切れのあるプレーができたと思うんですけどね。（笑）

一人ひとりのポテンシャルを活かせる社会に向けて、FDAの活動はもちろんですが、ダイバーシティカップやスポーツの機会をもっと増やしていきたいですね。

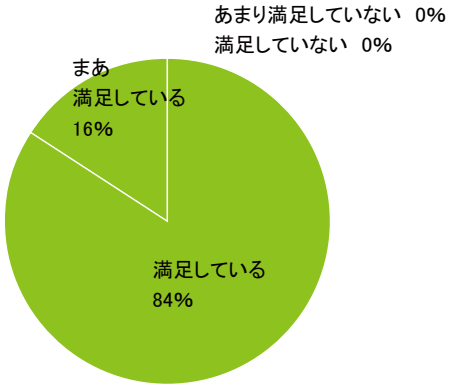
アンケート結果報告

開催日当日、参加者から集めたアンケートの結果を報告します。

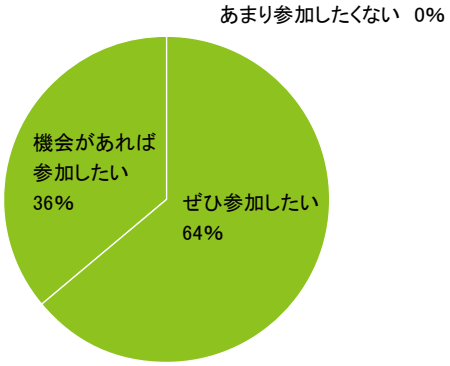
問 1. 今回の大会の情報はどこから得られましたか？



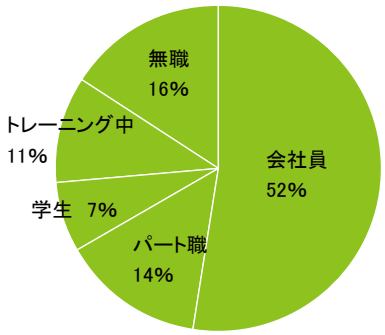
問 2. 今回の大会に満足しましたか？



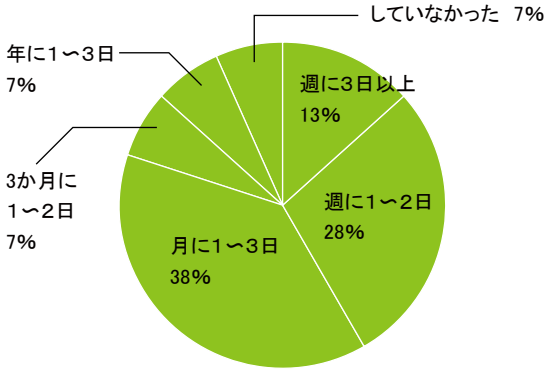
問 3. 次回、大会が開催されたら参加したいですか？



問 4. 現在の就労状況を教えてください



問 5. 現在、運動をどれくらいされていますか？

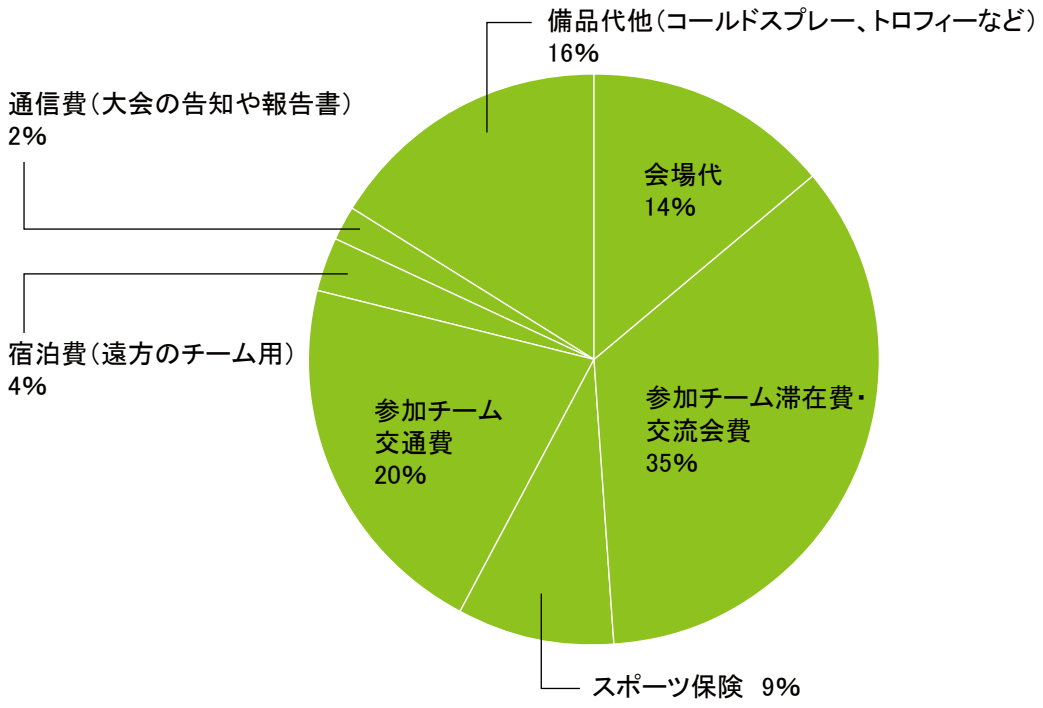


収支報告

収入内訳	金額
クラウドファンディングからのご支援（moonshot より 104 名）	1,011,750
チャリティ大会参加費（2014 年 11 月開催）	368,586
その他寄付	127,680
合計	1,508,016

支出内訳	金額
会場代	217,620
参加チーム滞在費・交流会費	515,393
スポーツ保険	140,040
参加チーム交通費	307,872
宿泊費（遠方のチーム用）	58,860
通信費（大会の告知や報告書）	28,900
備品代他（コールドスプレー、トロフィーなど）	239,331
合計	1,508,016

◉資金使途内訳



おわりに：ありのままでいい、空間の大切さ

こんにちは。ダイバーシティカップに参加したみなさんは、きっとこの冊子を手に取って、いろんなことを思い出されたかとおもいます。あの開放感、たくさん走ったこと、（きっと）あまりにすぐに来る体力の限界に出合ったこと、悔しかったこと、なんともいえぬ充足感。体とともにやってくる、深い気づきや、出会い。何よりも、新しい自分の可能性との出合い。

当日、その場にいなかったみなさんも、きっと似たような経験があるのではないかと思います。面倒だなあと思って参加した、子どもの頃のキャンプ。なぜか思った以上のつながりや、友情みたいなものを感じたり。頭で考えていたらきっといやだった、みんなで歌を歌うとか、テントを建ててみるとか。それらが、終わってみれば、体と気持ちが一致して、とてもすっきりとその場にいて、なんだかいろんなものが素直に受け取れて、そして心地よかったような感覚。

今回、私も、実はプレーする予定ではなかったんです。ただ、実行委員会の一人として、また、ビッグイシュー基金の理事の一人として、やっぱり体感しないとね！って、楽しみに「観に行った」はずでした。それが、ひょんなことから、「一緒にプレーしますか？」と言われて、実は、もう嬉しくてうれしくて、「はい！」と答えて、野武士ちゃんぷるチームに加えていただきました。「ほんとうに、いいのかなあ」とか、最初は戸惑いながら。

最高の体験でした。受け入れてくださった、チームのみなさん、ありがとうございました。21世紀に入って初めてフットサルのプレーでした（笑）。当事者として体験したことの多くは、この報告書で他の参加者が仰ってくれています。あっという間に息があがる。そんな中、自由に交代ができるルールだから、経験者から素人まで、それぞれの参加の仕方があった。ボールを夢中で追いながら、見えないつながりが見え始めて、息が合ってパスが通ったとき、何とも言えない感動がある。初めて出会った人たちが、とても大切に思えてくる。頭で考えたことでいっぱいのぼくらの毎日では、なかなかない一体感や居場所が浮かび上がってくる。

私がいたチームの場合、ゲームの前後半やゲーム後にあるミーティングが本当に素晴らしかった。コーチが、みんなに今の状態を尋ねる。円になったぼくらの中から、素直な感想や良い言葉が出る。スポーツと言えばいつも、経験者がすごくって、いつも追いつけない壁があったように思います。勝つことも素晴らしいけれど、それ以外の大切な要素を、ここではシンプルに共有していたと感じます。

本当は、誰もが、何かのマイノリティなんだよね。そんなことを、あのダイバーシティカップの一日を振りかえって思います。学校でも、職場でも、ほんとうは何かの疎外感を感じている。電車の中で、大勢の中で、別の場所で、自分だけかもしれないと思って打ち明けず、できるふりをして「マイノリティじゃないよ」って顔をして、過ごしているかもしれない。他所から来た者として、女性として、経験の浅い者として… でも本当は、みんな何かのマイノリティで、だからこそ、何かの課題や気づきに出合っている当事者で、そして、そのことがより素晴らしい世界をつくっていくのに、すごく意味のあることなんじゃないか。

よりよい社会をつくるとか、仕事でもイノベーションを起こすとかいうけれど、そんな肩肘張ったことばかりでなく、それぞれの多様さを、こんな感じで自然に知って、ふつうに受け入れあっていく。できれば、体を思い切り動かし、気持ちのいい空間で。そこにとても大事なヒントがあるように思う。それには、こういう、ありのままでいい空間がとても大切なんだろうなあと、（曇りでも）気持ちのいい代々木公園の空とダイバーシティカップの雰囲気を思い出しながら、思っています。

また、次のダイバーシティカップでお会いしましょう！

NPO法人ビッグイシュー基金理事

井上 英之

慶応義塾大学大学院
政策・メディア研究科特別招聘准教授

スポーツフォーソーシャルインクルージョン実行委員会

・青木弘達（株式会社リヴァ取締役）
・井上英之（慶應義塾大学大学院特別招聘准教授）
・岡田千あき（大阪大学准教授）
・大西連（NPO法人もやい理事長）
・佐野章二（NPO法人ビッグイシュー基金理事長）
・鈴木綾（NPO法人ビーンズふくしま理事）
・土屋薫（江戸川大学教授）
・蛭間芳樹（野武士ジャパンコーチ）
・星野智幸（作家）
・油井和徳（NPO法人山友会理事）
・米倉誠一郎（一橋大学イノベーション研究センター教授）

ダイバーシティカップ報告書
2015年8月31日
発行：スポーツフォーソーシャルインクルージョン実行委員会
編集・事務局：認定NPO法人ビッグイシュー基金
デザイン：大貫修弘
写真：横関一浩
事務局：長谷川知広、澤正輝、中原加晴、中村未絵、吉武華子
池田真理子、高野太一、粟原奈津子、川上翔

認定NPO法人ビッグイシュー基金（連絡先）
〒162-0065
東京都新宿区住吉町 8-5 シンカイビル 201 号室
TEL：03-6380-5088
FAX：03-6802-6074
HP：http://www.bigissue.or.jp
MAIL：tokyo@bigissue.or.jp

Diversity Cup

2015.7.4

in Yoyogi National Gymnasium
Futsal court